

(中間評価)

## 世界で活躍できる研究者戦略育成事業 (実施期間：令和元年度～令和10年度)

プログラム名：世界視力を備えた次世代トップ研究者育成プログラム

代表機関：京都大学（総括責任者：湊 長博）

### 取組の概要

本事業の目的は、2030年代に世界一級の研究者と成り得る、世界視力を備えた次世代トップ研究者を育成するためのプログラムを考案、実証、普及することである。これまでの若手研究者育成の国内外の事例を調査し、京都大学の取組を応用し、国際的な人材育成の経験が豊富な教育研究者及び部局が連結し、組織的に、国際的且つ産学の枠を超えた世界視力を備えた次世代トップ研究者育成プログラムの開発にあたる。コアとなる若手研究者には、企業及び海外連携機関等に所属する研究者との交流機会を提供し、自らの目標を明確化させ、その実現に各々が必要としているスキルセットとマインドセットの育成・強化にあたる。そのため、コンピテンシー及びプログラムの実証方法を構築するとともに、学内外の教育・研究機関及び企業の若手研究者によるプログラム参加を促進し、本事業により得られた知見を近畿圏～西日本地域、最終的には全国へ展開していく。

### (1) 評価結果

総合評価	進捗状況 (全般)	進捗状況 (事業運営 体制の構 築)	進捗状況 (研究者育 成プログラ ムの開発、 実証、普 及・拡大)	進捗状況 (研究者育 成体制の構 築)	進捗状況 (支援対象 研究者のサ ポート)	今後の進め 方と取組の 継続性・発 展性
B	b	b	a	b	a	a

総合評価： B（取り組みの改善や計画見直しを必要とする）

### (2) 評価コメント

事業前半は責任体制の変更が続き、運営体制が安定するまでに想定外の時間を要した。フェロー募集における応募者が減少しているという現状は、若手研究者にとって本プログラムに参加することのメリットが学内で十分認知されていないことの表れと考えられる。大学の中における本プログラムの位置づけに関して、京都大学における若手研究者育成の中心的な仕組みとして確立させるのか、あるいは白眉プロジェクトなど別の仕掛けがある中で、競合する仕組みとして競争的に併存させるのかをまず明確にすべきである。また、各種プログラムのうち、京都大学の既存の取組に依存する形となっている要素については、今後の他大学への普及に当たり、その条件等を明確化する必要がある。一方、R5年度に運営体制を刷新してからはこれらの問題点に対して検討が進められており、残りの5年間の計画が軌道修正されよく練られている点は評価する。人文学・社会科学の若手研究者も含め、世界視力をもつ研究者をいかに育てていくかは、日本全体の課題であり、京都大学が率先して、本プログラムの中で若手研究者育成の方策を提案・実施・検証す

ることを期待する。

・**進捗状況（全般）**：事業前半は責任体制が安定せず、マネジメント全体に支障をきたしたが、事業5年度目から新体制となり、新しく着任したPMのイニシアティブのもと軌道修正を図っている。今後は提案した計画を着実に実行することが重要となる。フェローの育成に関しては、当初の計画通りの人数に達してはいるが、今までの具体的な成果について、世界で通用する研究者としての萌芽がみられるようになったフェローが出現しているのかという視点でプログラム全体を今一度見直し、後半事業に取り組んでいただきたい。今後 L-INSIGHT フェローが学内でロールモデルとして認識されるように環境を整備し、フェローへの応募者（特に、人文社会系）が増えることを強く期待する。

・**進捗状況（事業運営体制の構築）**：初期からこれまでに事業運営体制の変更が度重なったが、最新の体制では京都大学 URA 組織である学術研究展開センター（KURA）の役割を大きくするなど立て直しが進められ、後半への継続体制が整った。体制の安定化のためには、まずは京都大学の中での本プログラムの位置づけ及び全学的な認知を向上させることが肝要である。

・**進捗状況（研究者育成プログラムの開発、実証、普及・拡大）**：ボトムアップの支援が中心になっており、HeKKSaGOn 等の京都大学の既存の国際的枠組みを活用して実施しているプログラムについては、個々のプログラム要素をもう一度再定義し、他大学への普及が図れるような汎用性を高める努力を期待する。また、GIILP や名誉教授メンター制度など評判の良いプログラム等のさらなるブラッシュアップと、メルボルン大学との新たな連携のように国際ネットワークを構築する取組をより拡大することが望まれる。

・**進捗状況（研究者育成体制の構築）**：KURA を中心した育成体制の構築は大変望ましいものであり、安定的な体制の維持が望まれる。KURA が L-INSIGHT を積極的に運営するために発生する負担に対しては、大学が責任をもってフォローし、手厚く支援することを強く要望する。

・**進捗状況（支援対象研究者のサポート）**：京都大学には白眉プロジェクトなど他の秀逸なプログラムが既に存在するため、L-INSIGHT の位置づけや特徴を学内で認知させることが求められるとともに、本プログラムの意義や参加してほしい研究者の姿を明確にすることが必要である。また、個々のフェローに対するサポートと実績（効果）はしっかり記録・分析した上で、研究者の成長に繋がるより良いサポートの在り方を検討し、全国への普及に繋げられるよう、今後も改良を重ねていただきたい。

・**今後の進め方と取組の継続性・発展性**：L-INSIGHT の再建のなかで KURA の役割と関与が明確に示されている。新体制による事業後半の活動が、本プログラムの参加者にとってより有意義かつ効果的であり、さらに他大学への普及を考慮したプログラム構築に繋げていくことを強く期待する。